
スーベニア

こうこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーベニア

【Nコード】

N0857Z

【作者名】

こつこ

【あらすじ】

わたしからあなたへ
あなたからわたしへ
わたしからわたしへ
あなたからあなたへ

飛び出す絵本

空の上には痛みなんて無いのだと思っていた
土の中には悲しみなんて無いのだと思っていた

犬の形をしたキャラメルと
キャラメル色をした犬と
私はどちらを踏んだのだっけ

遠いあの日
喜びを履いた心は踊り出し
そのまま何処かへ行ってしまったのだ

黄色いハンカチを持って幸福を捨てに行く途中
絶望を知り希望を知った

ハンカチを捨てて
それからもう一度拾って帰った

コウノトリが運んできたのは新しい命ではなく
息絶えたあの日の私だった

私は土に悲しみを埋め
そして空に痛みを放ったのだった

溜め込んでいたキャンディの包み紙を^{ていつおもの}ぶわりと撒き散らして
私はまた

新しい喜びを産む

今度は一緒に
踊れるように

%

縮こまる世界の
窮屈さに順応していたよ
いつの間にか

拡大したら貴方の顔
余計にぼやけてしまつて

頭の中画質悪くて
使いづらい

幸福は
怖いもので
ああ
だとしたら
怖いものは
幸福で

ろくに機能しないのに
まるで計算したみたいにサラサラ零れていくから

くだらない事ばかり詰まつた体は
風船一つで飛べそうで

忘れてしまった記憶はきつと
こんな夜の日の
出来事なんだろう

広がらない空間の
曖昧さに執着していたよ
長い間ね

もう少し縮めてみたら
貴方の顔

思い出せそうなんだけど
小さすぎて
見えないじゃない

磨り減ってく
口数の少なさを

今日は笑って
許してよ

シフト

ノイズだけで構成された音楽を耳に詰め込み
モノローグばかり綴った物語を片手に電車で揺られる

助走している内に終わってしまった競技と
握り締められたまま投げられる事のなかったタオル

空までは決して届かない樹木と
ぶら下がったまま使われる事のなかったロープ

幾つも点在する
終着点

温められる事で
孵化する命

土の中で瞬間を待つ命

ジャンクフードで形成された体はネクタイを拒む

スーパーで卵を買っては温め、温めては腐らない内に食べる

食卓にはヘビーローテーションされる卵料理と『いただきます』

その影で長い間順番を待つ『ごちそうさま』

足跡のつかないアスファルトに君を探して
出遅れた足は一週間前をひた走る

背表紙を突き抜けて
終着駅で始発を待つ

懐古の蘭

めつきり大人しくなつた携帯電話が

「接続できません」

「接続できません」

ばかりを繰り返すようになった

辺りは近未来的な風貌で

うんと高い建物が空を近くみせている

とまっていたのだ

携帯電話と、

それから、私の世界が

その外の世界は着々と動き

機械の犬は分解され、また生まれ変わっていた

とりあえず三百二十円を持って

コンビニ（らしきもの）で煙草を一箱買おうとしたら

「足りません千円です」とか言われた

どこからか

サイレンにも似た

賛美歌にも似た

断末魔にも似た、

やっぱりサイレンに似た音が

こちらに近づいてくる

何処かへ逃げようとしたけれど
名前のついてない土地などもう何処にもないのだった

私はもうすぐ

撃ち殺されるだろう

一日

隣のお爺さんの神々しい頭を

朝日に見立てる事から私の朝は始まる

恋人は、言うことをきかない犬の散歩をするような足取りで
昨日の空を見にいつてしまった

追いかける事もせず

時計を気にしながら化粧をする

私は間違っていないだろう？

鏡に問うてみるが返事はない

間違っではないが正しくもないのかもしれない

本当は追いかけたいのだと足が駄々をこね始める前に

あの電車に乗らなければ

いつまでも慣れないパンプスに振り回される私はさぞかし滑稽にちがいない

上司の危うい毛髪が

後輩の甲高い声が

社員食堂の月見うどんが

私の周りを旋回し

鴉が頭上を三度舞ったところで日が暮れる

脅えるものか

脅えるものか

家に帰ると、いつの間にか戻ってきていた恋人がタオルケットをミ
ルクに浸していた

そして「さあ眠ろう」と誘う

ぐしゃぐしゃに丸めたタオルケットを抱え込んで今日を保つ

明日のために

昨日を蔑ろにしないために

開け放した窓からざっざつと足音が響く

向かいの山下さんがウォーキングに出掛ける時間だ

山下さんは履き潰したスニーカーの靴紐だけを時々かえる

それを人生に見立てる事で

私の一日は終わっていく

たね

彼が種になったので

土をうんと柔らかくして庭に植えた

やがて芽が出てから

何十年もかけて

それが木になり

彼が生った時にはもう

私はしわしわのお婆さんだった

彼がぼとりと地に落ちた

今度は私が種になるのだ

そして

熟した頃にはまた、

レモンで色止めされた世界で

何かを違えたまま

何十年も

繰り返し

繰り返し

繰り返し

いつかどちらかが

植えることをやめてしまっただろうか

それとも

鳥に託すだろうか

海に投げるだろうか

糖度の高い果実のようなあなたを

私はいつまでかじらずにいられるのだろうか

きえぎえ

こすれて消えてしまいそうだった君を
ボールペンでなぞって安心したのも束の間
君は泣き止むどころかさらに酷く泣き出した

何度でも手間でも

その都度鉛筆でなぞって欲しかったのだと言った

*

いなくなりたい
ねむりつづきたい
たいたいたい、と
つよくつよくねんじ

よけいに
いのちのほのおを
ごうごう
もやしたりしていました

はたと
きづいたしゅんかん
ぜんしんの
ちからがぬけて
おもわず
わらってしまいました

*

書いては消し

書いては消し

手紙を書き直してばかりいたら

消しても消えなくなつて

文字の跡がうつすらと残るようになった

使いものにならなくなつた便箋の上

混ざり混ざつた文字達は知らない言語になつて

伝わらないまま

静かに燃えて

暗黙の下で

帰る場所も無いので

一日の大半は電車に揺られています

景色が引き伸ばされるので

座席には後ろ向きに座るのが好きです

スポットライトは見当たらないので

行きつけの寂れた街灯の下へ向かいます

夜に紛れてちらほらと

今日も順番待ちをしている人達がいて

皆思い思いに“得意なもの”を披露していきます

順番がくると僕はひしゃげたビニール傘を片手に

いつものチャップリンを演じました

空気はしんと冷たく

無言の喝采だけが響き渡ります

此処は僕の知りうるどの場所よりも

貴重な場所なのだと思います

朝日が昇り始めるので

人々はそれぞれの日常へと溶け込んでいきます

そして僕はまた

電車に揺られるのです

マッチ棒が必要だ

夜、幼いジョンとブライアンは家出の計画を練っている

夜、猫達は集会を開き暖かく過ごせる場所は何処かと情報交換に余念がない

三日前に片割れを亡くしたブーツはその半身で一人冬を持て余して泣いていた

彼の部屋では手のひらみたいな葉っぱがむくむくと育っている

私は気化していく悲しみを鼻から吸い込んでいる

二人、一つのカップにおさまってゆらぐ

隔てているのは皮膚だけではないと思い知るために

夜は彼を小さくみせる

夜は私を素直にさせる

話す事など何もないのだ

朝、少年達は少し大人のふりをした

朝、猫達は賢く生き延びている

ブーツは冬眠し始めていて、火照りすぎたケトルが焦れたように鳴きだし沈黙を破る

私は泡になって

コーヒーに浮かんだ

それはほんの少しだけ彼の朝を彩ったようだった

無題

蟻は目次の横でぺしやりと漬れ本の一部になりたがり
するりと舞い込んだ落ち葉は壁に張り付き飾られたがった

（私は、私は、）

野良猫は虎の背に焦がれ絨毯になりたがり
毛布はどうにもくるまれたがった

（私は、私は、）

踊りながら

私は一つ一つに題名をつけて回った

時には悲観しながら

（嗚呼嗚呼

きつと君はとても素敵なものを見たんだね）

手のひらをじっと見つめていると

頭と体とが離れてゆく

どこか遠い所

あるいはうんと近いのかもしれない

何にもなれなかった

かと言って何にでもなれるわけでもなかった

（私は私につける題名が無い）

バラバラと雨が降り出す

バラバラとジグソーパズルになる

ピカピカに浴槽を磨き上げた後のような感覚

（そして気付く

私だけが汚れている事と石鹸を買い忘れた事に）

バラバラと雨に混ざって私が消えたのか
バラバラと私に混ざって雨が消えたのか
それは最後までわからなかった

都会の隈さん

（羊が1匹羊が2匹数えていたら、3匹目の羊が転けて4、5、6と次々転けて、もかもこ重なり雲になって帰ってこなくなった

それきり羊は数えていない）

ある日都会の片隅で隈さんに出会いました

隈さんはお逃げなさいと言ったりお待ちなさいと言ったり

天の邪鬼な素振りを見せて翻弄した挙げ句、何だかんだで結局は家までついてきました

隈さんは少し躊躇しながら

これ落としましたよ、と昔僕が捨てた筈のボールペンを差し出したのです

ボールペンは出世したらしく万年筆になっていて、何とも迷惑そうな顔をしています

とりあえず二人を家の中へ招き入れはしたもののお茶菓子が無かった事に気付き、僕はお茶に添えて小話を一つ披露しました

しかしすぐさま万年筆に酷評されてしまい、僕はすっかり打ちひしがれてしまったのだけれど

飴玉をくれたのであつという間に忘れてしまいました

万年筆には帰る処があるらしく、お茶を一口飲んだ後そそくさと帰って行きました

隈さんには帰る処がないらしく、二杯目のお茶を飲み終えるといった間にか僕の目の下に住み着いてしまったのでした

外ではいつも圧力をかけられている僕は、家に帰ると豚肉に圧力をかけるのが日課です

すると美味しい角煮が出来上がるのです

（仄かに革命の匂いを放ちながら）

大抵の豚はくたくたになって「もうどうにでもしてくれ」と言うのだけれど、時折「こんなものには屈しないぞ」と言うものもいるのでそんな時僕の胸は少し軋んだりするのでした

窓の外では雲がもくもくと集まりだし、雨を降らせる準備をしています

ところが雨が降り出すかと思いきや、あちらこちらの空からは雲が羊になってぼろぼろと落ちてきていたのです

（僕は脳みそを広げると羊を拾い集める為に旅立って行った、隈さんと共に

それきり僕は帰ってこない）

かけおちこっこ

風にしかきこえない
そんな小さな

約束を交わした

わたしは少し大きい
ママのワンピースを
着てゆく

あなたは一箱

お父さんのマツチを
くすねてくる

他には何も持たなかった
荷物は

少ない方がいいもの

指と指を絡めて

丘を駆け

鳥のまねをして

木の枝をかき集めたら
地面に巣を作る

ワンピースで

あなたを包んで夜を待つて
眠る前に

マツチを一本すって

互いの顔を確認したら

あとはただ眠って

朝を待ち

家へ帰るだけ

こんな事を

かれこれもう

百回以上

繰り返している

今しか出来ない約束は

絶えず

わたし達を突き動かし

失望させるのだ

因果

蛇口をひねると

でろり、

液状の祖母が流れてきた

私は目をかたく瞑り

そそくさと手を洗う

洗い終えた手は

何だか前より汚れている気がした

洗濯機をあけると祖母

冷蔵庫をあけても祖母

浴槽に戸棚に祖母

父の手土産は祖母

真夜中のCMも祖母

本の最終ページに

観葉植物の葉の裏側にも祖母祖母！祖母！！

私を、削いでゆく！

憎んだものは

愛したものよりずっと

強く残り続けるのかもしれない

それでも、私は、

ゴミ箱から

桃の匂いがする

昨晚食べた残骸だろう

恐らくそこにも

祖母は未だ

家のどこにも

ひそんでいる

エイプリル

一月

一段とざわついているテレビ欄と白い猫がじゃれている
幸福を飲み込んだのか
怠惰を飲み込んだのか
その後ろ姿は鏡餅のようにふっくらと肥えて

二月

尿の温かさだけを
頼りに生きた

三月

新玉ねぎの潔い白さに
嫉妬した

四月

もう随分と春の顔を見ていない
いつも僕を騙していたあの人は
冬の間大事に飼っていた脇の毛を
そろそろ刈り始めている頃だろう

幼い姉弟が何らかの芽を持ってうろついている
しばらくしたら新しい名前をつけるに違いない
それはきつと、この先僕がもう、見つけることの出来ないものだ

肩で風を集めるようにしてぐるぐる歩く

南風になる準備はとうに出来ているけれど

春はまた顔も見せずにノックだけして過ぎ去っていく

鎖

ベンチの上で固まり続ける

やがて風化し僅かな隙間をサラサラとこぼれ落ち

その下で丸くなって眠る真っ白い猫になる

民家を探し縁側に佇み続け固まると

ボーリングのピンになり倒され起こされ果ては壊れて山積みになる

その中から選ばれ自由の女神（勿論レプリカ）のたいまつになり
なんとか明かりを灯そうと力んでみるが灯らず

結果、収縮加工され女神型百円ライターになり
偽物とも本物ともわからない炎を放つ

使い古された後分別に困った女に投げ捨てられ

下校中の小学生に散々蹴りとばされ

道すがら収集家の男に拾われ綺麗に磨かれて夕日の見える窓辺に並
べられる

やがて埃を被り始めると

故郷が日本だったかアメリカだったかもわからなくなり
段ボールに無造作に詰められ押し入れにしまわれる

数年後、男の孫娘の手に渡りブンブン振り回され遊ばれた挙句
テーブルの角にぶつかってポツキリ折れ女神と離れ離れ
庭に転がり蟻に運ばれるも折角なのでソフトクリームになり
巣に持ち帰られ食べられて蟻になる

やがて蜘蛛に食べられ蜥蜴に食べられ鳥に食べられ

食べられ続け人間になる

それから

ベンチの上で固まり続ける

今日木を植える

冷え切った食卓では

幸福の亡霊がさめざめ泣いている

もう少し気のきいた言葉を並べるべきだわ！

ヒステリックなママの声に醤油差しは怯え

少しだけ醤油を漏らした

愛してるよ、パパ

けれどママが作るアップルパイはわたしの嫌いなシナモンの匂いたつぷりだから

思わずパパの顔に投げつけたくなるの

愛してるよ、ママ

けれど時々ママの体のお肉をミートパイにしてしまう夢をみるの

じわじわと貴女に狂気を植えたのは誰かしら

それはパパだったのかもしれないしわたしだったのかもしれない

それはあいつだったのかもしれないしママ自身だったのかもしれない

そしてそれは誰でもなかったのかもしれない

（ママに効くお薬が見つからないの！）

暖かい食卓を望んでいたのはママだけじゃないわ

あの時頑張っていたのはパパだけじゃないわ

あの時ひとりぼっちだったのはわたしだけじゃないわ

（ママに効く言葉が見つからないの！）

ずるいのよ

一人だけ

そんな風になるなんて

だけどその方が生きてゆけるものね

そうでないとしても生きてはゆけないもの

戻さないで

戻らないで

そのまま

正気に戻ったらきつと

たちまちママは死んでしまうわ

エレクトリカル葬儀

遠い遠い遠い親戚のおじさんの訃報が届いた

葉書には

『着ぐるみ着用で来られたし

特殊メイクでも可』

と書かれていた

長い長い長い道のりを揺られたどり着くと

二番煎じ、いや三番煎じ程の崩れたキャラクター達が鎮座している

皆の表情はわからない

それ以前に誰なのかさえ

淡々と鳴り続ける木魚だけが正しいもののような顔をしていた

滞りなく全てが終わると

揃って近所を一周練り歩いた

音楽も無しに

永い永い永い別れを告げた後

フランケンシュタインのメイクをした子供が唐突に、それでいて当たり前のように明日の話を始める

皆、酒は一滴も飲まなかった

まみれた日

昼過ぎ目覚めたら僕は真っ白だった
シャワーを浴びようとしたら十二時から断水らしい
窓から見える隣の芝生は今日も青い
小さな池は溢れんばかりだ

隣の奥さんが庭に水をまく
ミネラルウォーターの水をまく
倒れたペットボトルから零れ出したものが
土の上に見たこともない国の地図を作っている
真っ赤なピンヒールがそれをぐしゃり

傍らに腰掛ける旦那さんは
さつきからずっと右足を小刻みに動かしている
苛立っているのか何かリズムを刻んでいるのか
ここからでは推し量ることは出来なかった

隣の家の長女は学校に行くふりをして
よく僕の家へこっそりやって来て時間を潰す

何をするでもない
転がっている

彼女は絞った形のまんま
からからに乾いた布巾みたいに転がっているのだ
窓辺の植物達を見やる

乾いている

渴いている

本当に水が必要なのは
一体誰なのだろう

もう反発しなくなった枕がベッドが

僕の形を保って戻らぬまま

ぽっかり沈み込んでいた

次女は年中ウエスタンブーツだった

腰につけていた銃は本物だったらしい
だから連れて行かれてしまった

僕はまみれていたから

何かの上を歩いていたよ

あの子も居なくなっちゃったし

思い切って隣の池に飛び込んでみた

小さな池に底はなかった

それから

瞬間見えた青い芝生は
人工芝だったよ

からだ

わたしは
にのうでと
ふとももで
勝負した
ちぶさは
使わなかった

あなたは
のどぼとけと
ひげで
勝負した
せなかは
使わなかった

わたしたちは
それぞれを
それぞれに使いながら
日々を過ごした

そのせなかに
おぶさりたいと
強く
思ってしまった日や
そのちぶさに
めでられたいと
強く
思ってしまった日は

向かい合つて
さめざめと泣いた

そこは
海ではなかった
湖でもなかった
みずたまりを
たゆたうように
ふれる手を
わたしは
いつまでも
甘噛みしなくなつて
歯をすべて
ぬいてしまふ夢を
よくみた

まだ犬歯が
とがっていたから
わたしたちは
まちがわずにすんだのかもしれない

ごつごつした
あなたのからだを
つまさきから
あるいは
つむじから
一晩中さわっていると
わたしは
一山越えたような

きぶんになつて
どうにもよわつた

ちがうものと
おなじものが
しつくりと
かみあわないから
わたしたちは
ただされていくしかない

あなたが
わたしのからだを
つむじから
あるいは
つまさきから
一晩中さわると
波の音が
とおくとおくから
きこえるきがして
どうにもなみだを
こらえなくなる

丘の上で

ある日彼の頭が大きくなっていた

正確には髪、が

複雑に絡まり生い茂るアフロを深い緑色に染めて

彼は木として残りの時間をあの小高い丘で過ごすことに決めたのだ

いつまでも景色に馴染まないままやがて枯れていくだろう

そうやって枯れていくのだろう

ティッシュにくるんだバスケットくれた

バスケットよりもティッシュにくるんだ彼の気持ちがとても愛しかった

あの頂のマロングラッセをいつか半分こしよう

延長コードで繋がるう

君を、

君を美しいものにしよう

わざと子供の声で歌えばいいの

毎週日曜日、私は屋根に登り、七色の全身タイツを着て、ブリッジをするよ

何度となく警察に連行されながら

そこから見えるかしら

定期的に現れる虹なんて素敵でしょう？

*

ある日姉ちゃんの腕が伸びていた
正確には接ぎ木がされていた

足を肩幅以上にどっしりと開き、伸びた腕をぴんと空に向けて
姉ちゃんは電波塔として残りの時間をあの小高い丘で過ごすことに
決めたのだろう

先日姉ちゃんの恋人がようやく骨になったそうだ
あそこには沢山の骨が埋まっていた
新しい骨が増える度に土がかけられ丘は高さを増していく
そうして僕らは離れていくのだと知った

特別じゃないものが特別になる瞬間があったね
あなたを色付きのティッシュでくるむよ
どうか許して下さい

翌日

大きな大きな薄緑のマントを買った

毎週日曜日、僕は屋根に登り、それをはためかせ、オーロラになる
つもりだ

円

陽気な処だからきつと大丈夫よね、と言って

国産よりも安いブラジル産の鶏肉をかごに入れる妻の横顔は春だ

お前は世界をどれくらい知っているのか

野菜コーナーから冷食コーナーまでがお前の人生なのか

お前は月一で爪切りになる

自分で隠れ、そして

自分で出てくる

いつも穏やかなお前の中も

恐らくキャベツのように複雑に渦巻いているのだろう

世界は小さくとも

日用品コーナーに

しぶとく居座る私を見つけた時のお前の顔が好きだ

此処は離島だよ

時々一緒に来よう

帰りに塩豆大福を買おう

何も見せてやれないまま

今日も陽だけが暮れていく

お前はそれでも笑うのだろう

それでいいと、笑うのだろうか

みちくさ

風の向きを知るために

煙草を吸うのだと言ったおじさんは旅人のような目をしている

私は立ちのぼる紫煙の終わり目から紡ぎだされるその先の世界を知りたかった

家にはない温かなものを道端で生み出す術を見つけたから

たくさんの道草を食べてお腹をいっぱいにすることだって出来た

日が落ちるまで

原っぱの

花かんむりの

存在を隠し続けて

とても長い道を

家は随分干からびていた

頭をこすりつけて神様に土下座をしていたら

そのまま逆さまになってしまった両親が庭には埋まっている

おじさんは

瞬きをしていた

まるで深く

息をするみたいに

そうして数回シャッターをきった後

プラスチックケースの中へと帰っていったんだっけ

ランドセルを開けば
異国の唄が聞こえてきて
涙が零れて家を潤し
生い茂った草が両親を隠した

その分

干からびていく私は
風向きがかわったことを
知る術がないから

時々段ボールに
入ったりしながら
いつか太陽にさらされ
許される日を
静かに
待っている

旋律

7時45分きっかり！お煎餅を割るような軽快なラジオ体操のリズムからやがてじゃぐじゃぐと咀嚼されてゆくおどろおどろしい音へと変貌！したところで太陽をマフラーで隠す男の子！をマフラーで隠す女の子！

（光で色んなものを隠していく
それでも髪をとかし味噌汁をすするだろう）

毎夜片足だけ逃げてゆく女の子の靴下！の余った方はクリスマスを待ちわびている！がそれを容赦なく引き裂く男の子！

（幸せになるんだと暗示をかける
そして今日も平和だと勘違いをして）

7時45分きっかり！にしか排泄出来ない神経質な男の子！はいつも決まって遅刻する！が最早それも計算の内！

キッチンに住む

巨大な食器棚の威圧感なのかそれとも中にいる父のものなのかそれはただ無言で閉じたり開いたりしている

圧倒されながら私は少しばかりの抵抗にぐいっと腕まくりをしてまな板の上で残虐の限りを尽くす

包丁はいつだって私の代弁者だった

母に染み付いたアルコールの匂いとキッチンに漂う諸々の匂いが喧嘩をしている
母が最後に発した言葉は何だったろう

（あの安い赤ワインはビーフシチューになるはずだったのに）

度々私は夜中に吐く癖があったけれど

汚いものはどこだか知らない所へ流れていく仕組みだったから誰も何も言わなかった

（ ）

キッチン、と呼ぶには大分くたびれた台所を丹念に掃除していると時々思い出したように父が「あんまりピカピカに磨くなよ」と言う

コンロは舌打ちを繰り返し、なかなか言うことを聞かなくなつて油の馴染んだ壁は前より穏やかな表情になった
みんな順調に汚れていく

「台所ってのはそういうもんだ」って言う

正確に計量する事で

ここが正しい場所になると信じ込んだ

目分量をなめていた私は既になめられていたのだ

（適宜適宜適宜！）

（その適宜がわからない！）

換気扇から流れていく匂いにこっそりSOSを込めてみる

しかしそれは誰かの鼻をくすぐり

ただ家路を急がせるだけだった

冷蔵庫は今日もほど良く私達に冷たい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0857z/>

スーベニア

2011年12月5日19時09分発行